子育ての仲間になること

園長　野中　泉

数日前、ひとりの保護者から「アトムは、変わってしまった。共同保育園と名前はついているけど、保護者と相談しながら、保護者の手を借りながらやっていこうなんて、園長も、保育士も、もう思ってないやろ」と手厳しい言葉を投げられました。そんな言葉が出てくる原因になった出来事については、まだ渦中にあることなのでここでは詳しく書けません。それでも、あえて、今この巻頭文で、ふれさせてもらうのは、その後に彼女が「今のアトムのほとんどの親は、黙って朝預けて、また黙って迎えにくるだけ。園に不満があっても、預かってもらえれば、それだけでいいと思って言わない親がほとんどやで」と言った放った言葉に、「そんなことないよ」とは言い返せなかったことを、ずしんと重く受け止めているからです。

その日私は、既に書き終えていた10月号の巻頭文を破棄しました。でも、その夜は遅くまでパソコンに向かいながらも、今は何を書いても言い訳になる気がして、新しい巻頭文は結局一行も書けませんでした。そして、10月1日、土曜日。本来ならアトムっ子は刷り上っているはずの今日、みかん組の保護者と保育士が開いてくれた小さな特別懇談会に励まされながら、私はもう一度、この巻頭文を書き直しています。

特別懇談会のゲストは、現在アトムのパート職員としてお手伝いしてくれているしんちゃん（新谷保育助手）。アトム保護者のＯＢでもあり、定年退職した前職では、東小学校での支援学級の先生でもあったしんちゃん（新谷）の「小学校のお話」に、熱心に耳を傾けた参加保護者は6名。6名の共通点は、全員が、発達相談を受けている、もしくは、発達相談は受けていなくても、我が子の個性を理解し、集団では手助けがいる場面があると思っている保護者たち。つまり、来春新1年生のスタートを通常学級でと考えるか、それとも、通級教室、支援学級という選択も視野にいれるかで、今まさに一生懸命悩んでいる渦中のお父さん、お母さんたちです。

実は、今年のみかん組は、アトムっ子のクラスのページでも折にふれてその様子が書かれているように、他のクラスに比べても発達の凸凹が大きいクラスです。クラス内に加配児として個別の支援を必要とする子が7名。その他にも発達相談にかかった経験がある子を全て数えたら、30名のクラスの半数近くがそれに該当します。ですが、絶対に必要と思いながら、私も担任も今日のように、当事者の親同士が直接悩みを共有したり、胸のうちを語り合う場を作ることには、最後の一歩が踏み出せずにいました。踏み出せない背景には、「個人情報」を園が勝手に他人に共有できないという壁、つまり「〇〇ちゃんも、発達相談に行っているのよ」とは、私たちから他の親に伝えられないタブーが立ちはだかっていたからです。でも、この夏、就学相談の過程で、ひとりのお母さんが発した正直で切実なひとことが、躊躇していた私たちの背中をドンと押してくれました。「支援学級がいいのか、通常学級がいいのか。私がこの子の人生の大事な選択をするのが怖い。みんな、どうやって決めるんやろ。他のお母さんの話も聞きたいよ」ポロポロ涙をこぼしながらそう言ったお母さんの切実さを胸に、担任の志賀ちゃん（志賀保育士）は、同じ思いを抱えているかもしれない親たちひとりひとりに、こう声をかけて回ってくれました。「参加は自由。でも、もし、同じように一緒に話したいと思ってくれていたら、集まって話そうよ」。

残念ながら、私は他県での仕事があり、懇談会には間に合わなかったのですが、散開した直後の楽しそうなお母さんたちには会う事ができました。懇談会が終わった後も、名残惜しそうに輪になり「発達相談に付いていくと、イライラしてついつい手を出したくなるよね」と笑いあったり、「卒園しても、そっちの学校の支援学級は、どんな感じ？って聞ける仲間がいるって心強いよね」とうなずきあう姿や、「隠すことじゃないよねって、こんなふうに話せる場があるアトムでよかった」と涙ぐむお母さんたちの姿に、本当に胸がいっぱいになりました。

冒頭の「アトムは変わってしまった」と怒ったお母さんは、これまで長年アトムのことも、親同士のつながりのことも一緒に考えてきてくれた仲間です。そして、彼女の指摘は残念ながら今のアトムのひとつの現実です。でも、その一方で、ひとりひとりの保育士が、そうじゃない関係を築きたい、そうじゃない場をつくりたいと、もがきながら奮闘しているのも、アトムの本当の姿です。改めて、彼女が必死で問いかけてくれた宿題を真摯に受け止め、職員と保護者と一緒に考えあいたいと思っています。